

特集
無量光院以前の石敷

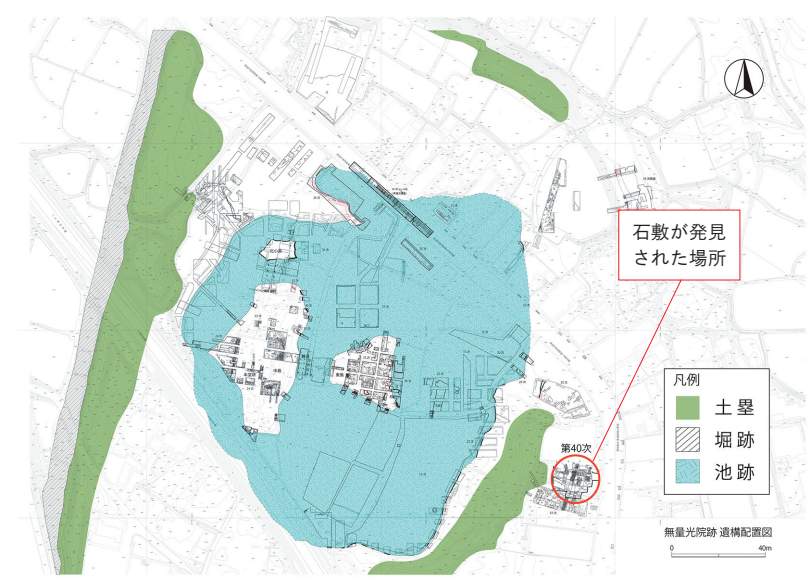
無量光院跡は、奥州藤原氏三代秀衡によって造営された寺院の遺跡です。無量光院跡40次調査では、その無量光院以前の石敷通路と築地塀が見つかりました。今回見つかった石敷通路と築地塀はセットで、無量光院以前にあった寺院の入口であったと考えられます。

宇治平等院を模す
無量光院跡は、昭和27年に文化財保護委員会(現在の文化庁)によって調査が行われました(1次調査)。この調査によって、鎌倉幕府が編さんした歴史書「吾妻鏡」に「宇治平等院を模す」と記されたように、無量光院跡の本堂跡が平等院鳳凰堂に似ていることが確認されました。

無量光院以前の通路
石敷は無量光院跡東土塁の脇から見つかりました。長さ約12m、幅約6mの範囲に広がり、東西方向に延びていました。この石敷は無量光院跡東土塁の下から東西方向に細長く見つけたことから、無量光院以前の通路と考えられます。なお、この石敷の続きはなく、今回見つかった範囲で終わるようです。



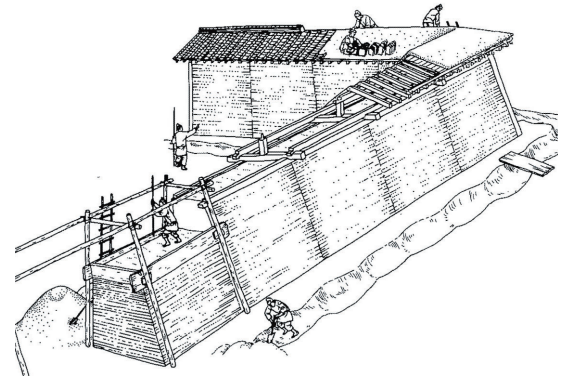
【石敷と金鶏山(東から)】
土塁(シートに覆われているところ)の背後にあるのが無量光院跡、奥に金鶏山が見えます。石敷の方向は北から東へ13~15度振れており、無量光院跡の軸線(東へ8度)とは異なっています。



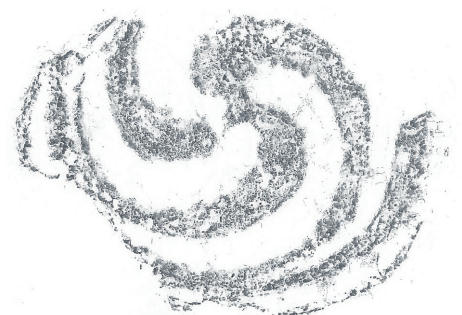
【石敷の場所】
今回は東土塁の脇を調査しました。

築地塀 寺や役所を囲む塀

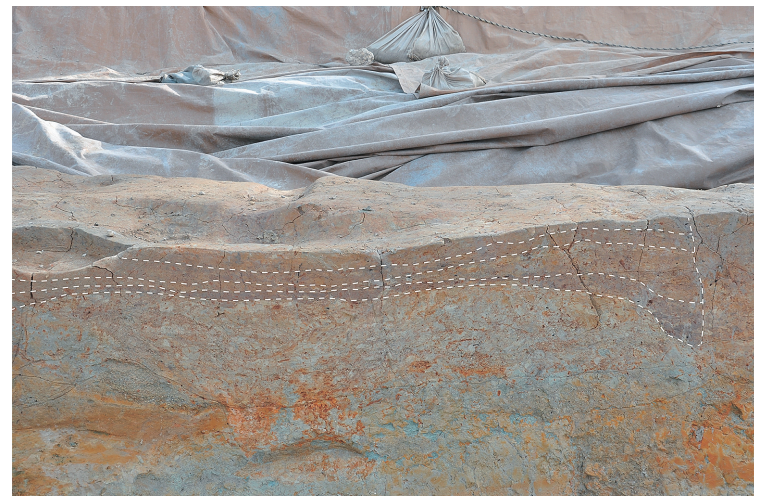
築地塀は土を水平に搗き固めて造る構造の土塀です。黄色と茶色の土を交互に積んで塀として使用していました。無量光院を造る際に壊されていたため高さは34m程でしたが、3年前の調査と併せて長さ約15m、幅約1.6mの範囲で見つかりました。石敷通路の端から見つかり、方向は直角であることから、石敷とセットの塀と考えられます。



【築地塀を造る時の想像図】
※奈良文化財研究所2003「古代の官衙遺跡I 遺構編」より



【出土した瓦の拓本】
屋根の先に葺かれた瓦で「三巴文」と呼ばれる模様があります。



【築地塀】
黄色と茶色の土が交互に積み重ねられていました(積み方は右下【築地塀を造る時の想像図】を参照)。築地塀は志波城・胆沢城・徳丹城などの城柵や、安倍氏によって建てられた寺院と考えられている長者ヶ原廃寺跡で見つかりました。平泉町内では、これまでに観自在王院跡から12世紀の築地塀が見つかりました。



【石敷と築地塀】
赤枠内は築地塀が見つかった範囲、3年前の調査でも写真奥から続きが見つかりました。石敷通路の端から築地塀が始まり、方向は直角であることから築地塀と石敷はセットであることが分かります。



【真上からみた石敷】
大小2条の溝で3つに区画され、一番東側では直径10~20mm、中央では30~50mm、西側では20~40mmの石が敷かれています。石敷は平坦ではなく西から東に向かうにつれて低くなっており、高低差が40~50mm程ありました。

石敷と築地塀の発見が意味すること

今回見つかった石敷と築地塀のセットは、無量光院以前にあった寺院を囲む塀とその入口の通路と考えられます。無量光院以前にも同じ場所に寺院があり、それを壊して無量光院を造ったという土地利用の変遷が分かったことは、平泉の歴史を考える上でとても重要な発見です。